

第2回日本ジオパーク全国大会 洞爺湖有珠山大会シンポジウム

ジオツーリズムを通じた観光地づくり～変動する大地との共生～

ジオパークは、ジオ（geo＝大地・地球）を学び、ジオに親しみ、楽しむことができる魅力ある地域です。ユネスコの支援により2004年に設立された「世界ジオパークネットワーク（以下、GGN）」を中心に世界各国で推進されており、2011年10月現在、27カ国87地域が世界ジオパークに登録されています。

本年3月に発生した東日本大震災では、ジオの力のすさまじさに世界中が驚がくしました。ジオの上で暮らしている私たちはジオの力や共生する方法を学ばなければならないということを知りました。ジオを学び、ジオに親しむジオパークの取り組みは、私たちの豊かな暮らしがいつまでも続いていくために極めて大きな意味を持つものと期待されています。

数十年毎に噴火を繰り返す有珠山のふもとの洞爺湖有珠山ジオパーク（伊達市、豊浦町、壮瞥町、洞爺湖町）では、ジオの脅威を目の当たりにした地元住民や自治体、有識者などが中心となって噴火の遺構を保存し、ジオを学び、地域の減災につなげる取り組みを行ってきました。その取り組みが世界で認められ、2009年8月には日本で最初の世界ジオパークとなりました。

日本のジオパークの先進的であるこの地で、今年9月28日から4日間、「第2回日本ジオパーク全国大会」が開催されました。大会期間中には取組事例発表やポスターセッション、分科会、ジオツアー、物産展、フォトコンテストなど、ジオパークの取り組みを楽しみながら知ることができる多くのプログラムが生まれ、日本中のジオパーク関係者や地元住民など、延べ2,000人が参加する盛大なイベントとなりました。

9月30日に行われたシンポジウムでは、ジオパークが地域や日本、世界に果たす役割が議論されました。はじめに洞爺湖有珠山ジオパークの学識顧問である2

名の有識者からの講演、続いて日本ジオパーク委員会事務局の渡辺真人氏をコーディネーターに、講演者を含む6名のパネリストでパネルディスカッションが行われました。本稿ではシンポジウムの概要を報告します。

基調講演 1

災害列島とジオパーク

～地球をよく知り、地球と仲良く～

「この会場に立つと、19年前にこの観光都市で行われた防災講演会での地元町長の言葉が思い出されます。『最近私は次の世代の夢を見た。自分がこの世を去った後、この地域の中心になっている人たちが墓石の周りで話している。1977年噴火の後、次の噴火に備えることをしなかったために、我々はしっぺ返しを受けて



岡田 弘 氏
北海道大学名誉教授・洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会学識顧問

しまった…」その後、町長が中心となって次期噴火を見据えた防災マップづくりを行い、自然をよく知り自然と付き合っていこうという動きが始まったのです」。

1977年の有珠山噴火以降、この地で火山専門家として減災に尽力してきた“有珠山の主治医”、岡田氏の冒頭の言葉は、それまで観光地として災害を封印しようとしてきたこの地が、自然と共生して地域の発展を目指すきっかけとなった出来事を紹介したものです。2000年噴火は小規模でしたが、人の生活圏に近いところであったため、もし噴火前に対策が行われていなければ重大な被害が生じたことでしょう。19年前のこの出来事が住民を守ることになったのです。

「皆さんが宿泊されているホテルは、大体このレッドゾーンの中にあると思います」。有珠山の防災マッ

プをスライドに映しながら、活動的な火山と人がこれほど密接に暮らす地域は世界でも稀であること、20世紀の有珠山噴火に相對した研究者や地元の人々の適切な行動などについて紹介されました。20世紀以降、火山観測と警戒体制が飛躍的に向上したことで火山災害の犠牲者は大きく減りました。レッドゾーンに宿泊できるのも、多くの経験と努力、そして火山減災の先進地・洞爺湖有珠山だからこそだというわけです。

講演の最後は、2004年スマトラ沖大津波のとき、学校や祖母から学んだ知識をもとに適切な行動をとって多くの人の命を救った2人の子供の話でした。「知っていること、普段からしていることは（災害時にも）できるのです。災害を軽減できる可能性が高いのが火山災害と津波災害です。自然災害の減災にジオパークが果たす役割はとても大きい。特に修学旅行でこの地を訪れる、未来を担うたくさんの子供たち。大地に学び、大地とともに生きることを提案し実践するジオパークのプログラムを充実することが、この地や国の減災、さらに観光の発展にとっても有益です」と結びました。

基調講演2

知的観光資源としてのジオパーク

～新たな観光の創造をめざして～

「日本には恐らく1万人以上の考古学者がいますが、観光分析考古学者は私ぐらいだと思います。ジオパークを新たな観光資源として考えるときには、こういう人間がたくさん出てきてほしい。火山学者や地質学者や人類学者が観光を論じること必要だと思います」。そう語り始めた大島氏は、伊達市の顧問として地域づくりに携わった自らの経験や課題解決の事例をもとに、知的観光資源であるジオパークの可能性を提案されました。

伊達市では、住民ボランティアが主体的に地元の文

化を発信していったり、地域の文化財をただのまちの歴史としてではなく、なぜ6000年も前に人が住みつけたのか、どのようなことを考えながら暮らしていたのかといった背景のストーリーを積極的に伝えてきたことが奏功し、体験学習に訪れる小学生が1万人を超える成果に恵まれました。また、商工会や観光協会、個人事業主などの商業者に文化財を活用した事業の実施を提案し、幾つもの学会を誘致して、地域の文化や遺産に関する情報発信に成功しました。

ほかにも、有効な観光資源を持たないまちに人を呼ぶため、面白いまちだと感じてもらう努力もされています。伊達市在住の芸術家の協力を得て子供たちの芸術活動を支援する多くの事業に取り組み、数十年後に世界に通用するような芸術家を育てようとしているそうです。「こうしてまちを変えて見せることによって人が寄りやすくなるという発想から、文化も観光資源として活かせるのではないかと考えた。“知的観光資源”という言葉を考案した所以です」。

少子高齢化や週休2日制の定着、旅行者の環境に対する意識の高まりから、観光形態は量から質に変わってきていることを指摘し、「近年のこうした変化は“見る観光から学ぶ観光へのシフト”と言われますが、さらに、“学ぶ観光から考える観光”の時代が来ると思います。たとえば最低限の施設しかない北黄金貝塚に1万人の子供たちが訪れるのは、そこでものを考えることができるからです。いわゆる知的観光資源は、こうした考える観光に合致するもので、その最たるものがジオパークです。日本の新しい観光の形を提案することができるジオパークを、この新たな枠組みの中でいかに発信していくか。行政はもちろん、地域、エージェントなどにも意識を改革してもらうことが大切です。ジオパークというものを観光スポットの要としてもっと積極的に活用してほしいと思います」と述べ、「ジオパークの観光に対する可能性は、とても大きい」と結びました。



大島 直行 氏
伊達市噴火湾文化研究所所長・洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会学識顧問

パネルディスカッション

ジオツーリズムを通じた観光地づくり

～変動する大地との共生～

パネルディスカッションのコーディネーターは、日本のジオパーク構想立ち上げの中心人物の一人である渡辺真人氏で、6名のパネリストを招いて、ジオパークの発展に向けた熱い議論が交わされました。

パネリストの活動紹介

三浦 私は有珠山の噴火を2度経験しました。2000年噴火ではホテル経営者として、社員や家族を抱えて逃げ出すことが許されませんでした。避難解除後には風評被害・人情被害で来客が激減しました。そんな中、ホテルの部屋から客が噴煙を眺めているのを見て、屋上で客に噴煙を見せながら解説することを始めました。その取り組みが地域住民のボランティア活動へと広がり、観光地としての再生の道へとつながりました。現在も地域で多くのジオツアーを継続的に行えるまでに至っています。



パネリスト
三浦 和則 氏
とうや湖温泉旅館組合
長・洞爺観光ホテル代
表取締役社長

中貝 ジオパークは知的で、災害とも結び付いて「緊張感」が付きまっています。それをいかに柔らかに楽しむことができるか。地形地質、気候風土、それに適応した生物多様性、人間の生活様式・文化などを過去の地球活動と結び付けて理解し、学び楽しむことがジオツーリズムだと思います。そして、売るべきものを売るのでなく、売れるものを売らなければなりません。客の顔を見ながら売れるツアーを作っていきたいと考えています。



パネリスト
中貝 宗治 氏
山陰海岸ジオパーク推進
協議会会長・兵庫県豊
岡市長

坂元 阿蘇はジオパーク推進前から年間1,800万人が訪れる地でした。ジオパークに取り組む理由は、私たちが暮らす阿蘇地域が世界的に素晴



パネリスト
坂元 英俊 氏
阿蘇ジオパーク推進協
議会事務局長・財団法
人阿蘇地域振興デザイ
ンセンター事務局長

らしいということを知ってもらうだけでなく、特に地域住民が日々の暮らしの中でそれを自覚して生活していくことが大切だと考えているからです。ジオパークは日々の暮らしや観光、教育などに密着しているということを自覚し、地域全体で取り組むものだと思います。

■ 柴田伊廣氏は、活動紹介の代わりに、日ごろガイドの先生役として行っている室戸ジオパークのジオツアーを、スライドを用いてバーチャルで展開しました。

災害と観光



コーディネーター
渡辺 真人 氏
日本ジオパーク委員会
事務局・独立行政法人
産業技術総合研究所
地質標本館アウトリーチ
推進グループ長

渡辺 三浦さん、2000年噴火後に来訪者に噴火を見せようとしたとき、周囲の反応はどうでしたか、1977年は噴火を隠す風潮だったと聞いています。

三浦 初めのうちは「変わったことをするなあ」という反応でした。それが地域に広がり、ようやく風評被害・人情被害を払しょくできました。中には「噴火を売り物にするな」「遺構など壊してしまえ、観光地なのだから綺麗なのが当然」という声もありました。

渡辺 坂元さん、阿蘇でも災害と観光という両面がありますが、地元の人たちは火山の近くに住んでいるという認識はあるのですか。

坂元 観光地は危険であってはいけませんが、一方で危険と隣り合わせの場所だからこそその魅力もあります。安全にはかなり配慮していますが、地元の人々は火山の恵みを認識している一方で、危険が近くにあるという認識はあまり持っていません。

渡辺 岡田先生、洞爺湖有珠山地域だけでなく、日本全体どこも安全な場所はないと思います。

岡田 世界的にみても洞爺湖温泉は間違いなくハイリスク。ただし、そこに住む人々はそれを理解し、来訪者の安全確保に努めていることが前提にあります。100年の尺度で見れば、関東大震災も経験しているようにリスクはどこにでもある。それをどれだけ理解し

てうまく付き合っ暮らしていけるかが重要です。

人のつながり

中貝 山陰海岸は広域かつ多彩であるがゆえにアイデンティティの確保が難しい。しかし、ジオの取り組みによって仲間が増えてきました。共通の課題に共に取り組むことで一体感ができ始めています。また、ジオには人の姿があることが大切です。洞爺湖有珠山地域には魅力的な地質がたくさんありますが、そこに暮らす人々が大地と向き合い、一生懸命それを伝える努力をしていることに何よりも魅力を感じました。

柴田 ジオは何も話さないで、それをつなぐインタープリター[※]がいかに魅力的であるか、そして地域の誰に話しかけてもジオを意識した話ができることを目指しています。昨年のジオパークマスター講座によって、連帯感とつながりができました。事務局を介さないネットワークが徐々にできつつあります。



パネリスト
柴田 伊廣 氏
室戸ジオパーク推進協議会地質専門員

人づくり

三浦 観光関係者が集客のために行うというよりも、地域づくりという観点で、住民全体でジオツーリズムを推進していくことが必要です。

中貝 「知る」ということはマイナスになることもありますが、自分の故郷を誇りに思う気持ちが醸成されます。ジオパークとは何か、どう人づくりするかを考えることが既に人を育てています。ジオの知識を背景にさまざまなアイデアを実現していくことによって、意図せずとも自分たちの地域を学び、誇りを持って人を育てることが起き始めています。

坂元 人づくりというよりも人が育っていくのだと思います。商店街の人たちは、生活の中で普段何気なく使っている水がジオの恵みだと気づくことによって、水を調べ、見せ方を考え、商品を開発しました。ジオ

を案内する人も案内をする中でもっとジオを学ぶ必要性に気づき、次第にジオの要素を使って地域の魅力を話せるようになっていく。事務局側もこの地域のこのような人々がいることに気づき、ともにジオツーリズムを考えていくべきだと思います。

「知ること」「気づくこと」のきっかけ

渡辺 「知れば知るほど知りたくなる」「気づくとどんどん自分でやりだす」という言葉が出ましたが、知るきっかけ、気づくきっかけはどんなことでしょうか。

坂元 地域住民はそこにあるのが当たり前で魅力に気づかないことが多いですが、私たちのように客観的に魅力を感じている人との会話の中で気づくことができます。それを自分たちの言葉で伝えられるようになるそれが自慢になり、そこに人が集まってきます。

柴田 ジオパークの市民説明会を行った後、参加者からたくさんの情報をもらいました。地域で普通に暮らしている人たちの中に入っていき、教えてくれた人の興味を共感していくことで、これまで会ったことのない人をどんどん発見していくことができています。

まとめ

岡田 地球が動くたび、その土地に暮らす後輩たちが恩恵を受ける土地ができます。地球の営みをそのように見られると、いろいろなものに活かすことができる。これがGGNのねらう研究・保全、教育、文化であり、ジオパークの根幹なのではないかと思います。

大島 ジオパークの資産を考えるときには、自然と人との関わりにストーリーを持たせて観光資源としていくことが大事だと感じます。

渡辺 「自然と人との関わりを見せていくこと」はジオパークの重要なキーワードですが、それをまだ十分に活かせていないと感じます。そして、それを人に伝えていくのもまた人です。ジオパークのキーワードは「人」だということです。

(特定非営利活動法人環境防災研究機構北海道主任研究員

伊藤 晋)



※ インタープリター (interpreter)
通訳者、解説者。ここではジオと人との「仲介者」となってジオについて解説する人。